イザヤ書64－65章 「残りの民の祈り」

1A 苦難での願い求め 64

1B 天から降りて来られる方 1－3

2B 不義の告白 4－7

3B 御民への眼差し 8－12

2A 御民の選り分け 65

1B 逆転する呼びかけ 1－7

1C 御名を呼び求めなかった国民 1

2C 主が御手を差し伸べた民 2－7

2B 残りの民と反逆の民 8－15

1C 主のしもべ 8－10

2C 反逆の民 11－15

3B 新しい創造 16－25

1C 過ぎ去る涙 16－19

2C 生き長らえる子孫 20－25

本文

イザヤ書 64 章を開いてください。私たちの学びは、本当に最終段階に入っています。ここでは、主がエルサレムに戻ってこられて、都を栄光に輝かし、また慰める約束から始まっています。そして、残りの民の祈りが始まっています。彼らが患難において苦しみを受け、その時に主に対して告白して、それで主が答えられるという、祈りの中でのやり取りを読んでいます。それで、前回、63 章の後半から、彼らが古の時代、イスラエルの民がエジプトから導き出されたことを思い出し、今の苦難をそのままにしなでくださいと嘆願しています。

その嘆願が 64 章にも続きます。そして 65 章で、主の返答があります。それが、とても意外なものでした。早速、読んでいきましょう。

1A 苦難での願い求め 64

1B 天から降りて来られる方 1－3

1 ああ、あなたが天を裂いて降りて来られると、山々はあなたの御前で揺れ動きます。2 火が柴に
燃えつき、火が水を沸き立たせるように、あなたの御名はあなたの敵に知られ、国々はあなたの
御前で震えます。3 予期しない恐ろしいことを あなたが行われるとき、あなたは降りて来られ、
山々はあなたの御前で揺れ動きます。

患難の中にある民は、モーセの時の、シナイ山に天から降りて来られた主の栄光の力を思い出しています。「出 19:16 三日目の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上にあって、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。」その時の御力の現れと恐ろしさが、主が地上に来られる時には、顕著に現れることを思っているのです。

天の栄光が地に現れる時、そこには火があります。モーセが主から預言者として召された時、燃える柴によって現れましたね。神は、燃え尽くす火であります。それはこの方の聖さと正しさが、地上における罪や不法、神への反抗に対して現れ、裁きとして現れるからです。それゆえ、敵どもが主の御名を知り、国々が震え動くのです。その畏れ多い姿を思い巡らしているのです。

2B 不義の告白 4－7

4 とこしえから聞いたこともなく、耳にしたこともなく、目で見たこともありません。あなた以外の神が自分を待ち望む者のために、このようにするのを。

そうですね、このようにして、ご自分を待ち望む者に現れてくださる方は、神々と呼ばれるもので、どこにも耳にしたことがありません。目で見たことがありません。神々と呼ばれるものは、物言わぬ偶像です。しかし、主なる神は恐れおののくほどの、栄光と威厳、力をもって現れてくださいます。

5 あなたは会ってくださいます。喜び、正義を行う者たちに。彼らは、あなたの道であなたを心に留めます。実にあなたは、激しく怒られました。私たちはその道で久しく罪の中にいたのです。私たちは救われるでしょうか。

主は、ご自分が来られる時、この方を喜び、正義を行う者たちに会ってくださいます。キリストのうちにある者は、その信仰が義と認められています。また歩みにおいて、キリストの義を身につけて歩みます。そういう者たちには、この方の到来は喜びなのです。「Ⅱテサ 1:10 その日に主イエスは来て、ご自分の聖徒たちの間であがめられ、信じたすべての者たちの間で感嘆の的となられます。そうです、あなたがたに対する私たちの証しを、あなたがたは信じたのです。」

そこで、地上にいる残りの民は、自分たちが主の到来にはふさわしくない者だとして、へりくだり、罪の告白をしています。自分たちの民の歴史は、久しく罪の中にありました。そこで、果たして救われるのだろうかと、悔恨の思いを述べています。

6 私たちはみな、汚れた者のようになり、その義はみな、不潔な衣のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、その咎は風のように私たちを吹き上げます。

彼らの罪の認識はとても深くなっています。自分が義だとみなしていることも、主の前では不潔

な衣のようだと告白しています。直訳では、月の物によって汚された布のことです。レビ記には、これを不浄の期間と呼んで、血が出ている間は汚されているとみなされていますが、神に受け入れられないということです。私たちがいくら正しいことをしていたとしても、それが神の前ではそれだけ汚れたものなのだ、ということです。

ここに、人間の根源的な、存在としての罪深さがあります。しかし、それは神の前だからこそ見えてくるものです。人間そのものが悪なのではなく、光である神の前にいると、自分が義だと思っていることも、全くそうではなく、罪深いことが示されるのです。「ロマ 2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。」福音は、単なる人間的な道徳の次元を超えています。

7 しかし、あなたの御名を呼ぶ者はなく、奮い立って、あなたにすがる者もいません。あなたは私たちから御顔を隠し、私たちの咎によって、私たちを弱められました。

自分たちが不義を行っているのに、それで憐れみを求めて御名を呼び求めることさえしていないと告白しています。ロマ 3 章にも、「義人はいない。一人もいない。悟る者はいない。神を求める者はいない。（10-11 節）」とあります。

3B 御民への眼差し ８－１２

8 しかし、今、主よ、あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの御手のわざです。

主に嘆願をしています。一つは、主なる神は私たちにとって父であること。そしてもう一つは、陶器師であることです。父は子を捨てることはできません。陶器師は、自分の持ってきた粘土を練ることはあっても、捨てることはありません。形を変えて、作品にすべくあきらめません。神はその愛のゆえに、また造り主であるがゆえに、私たちから離れることはできないということです。

9 主よ、どうか激しく怒らないでください。いつまでも、咎を覚えていないでください。どうか今、私たちがみな、あなたの民であることに 目を留めてください。

主に罪の赦しを願っています。ここでその根拠は、「あなたの民であることに 目を留めてください」ということです。これは、正しい願いです。主はご自分の造られた民を愛しておられます。その契約のゆえに、いつまでも激しく怒られることはありません。その御怒りは一時的なもので、その二倍もの憐れみをもって、祝福してくださいます。

しかし 65 章を見ますと、御民といっても、ただ血縁関係がイスラエルの民だからといって、自動

的に、悔い改めも信仰もなくて、そのまま神の国に入るのではありません。65 章にて、主は、「あなたの民であることに 目を留めてください」という彼らの嘆願に対して、返事をなさいます。

10 あなたの聖なる町々は荒野となっています。シオンは荒野となり、エルサレムは荒れ果てています。11 私たちの聖なる美しい宮、私たちの先祖があなたをほめたたえたその場所は 火で焼かれ、私たちが宝とした所は、すべて廃墟となりました。12 主よ。それでも、あなたはじっとこらえ、 黙っていて、私たちをこんなに苦しめるのですか。

イザヤにとって、バビロンによるエルサレム破壊は先の話です。そのことについて、残りの民が嘆いていると考えることができますが、今、彼らの嘆願は、それを越えています。終わりの日、大患難にイスラエルの民が入っている時に、エルサレムが荒らされてしまうのです。「ゼカ 14:2-3「わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。都は取られ、家々は略奪され、女たちは犯される。都の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は都から絶ち滅ぼされない。」【主】が出て行かれる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。」このようにして、都の半分が、攻め取られて、家々が略奪されて、火で焼かれます。その残された人々が、ここで祈り叫んでいるのです。

2A 御民の選り分け 65

この祈り求めに対しての主のことばが、驚くべきものです。

1B 逆転する呼びかけ 1－7

1C 御名を呼び求めなかった国民 1

1「わたしを尋ねなかった者たちに、わたしは尋ね求められ、わたしを探さなかった者たちに、わたしは見出された。わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって、『わたしはここだ、わたしはここだ』と言った。

イザヤ書を読むと、旧約と新約という区別が見えない、元々、区別して別物だとするのが間違っていることに気づきます。これまで見てきたのは、私たちは罪深く、救いようのない存在のゆえ、神ご自身の義によって救う、恵みによる、信仰による義をイザヤが預言しているのを読んできました。

この箇所は、明らかに、イスラエルの国民以外の民、すなわち異邦人への神の憐れみが書かれています。福音書と使徒の働きには、まさにこの流れが書かれています。すなわち、主は、初めイスラエルの失われた羊のために来られたことを話しています。「マタ 10:5-6 イエスはこの十二人を遣わす際、彼らにこう命じられた。「異邦人の道に行ってはいけません。また、サマリア人の町に入ってはいけません。むしろ、イスラエルの家の失われた羊たちのところに行きなさい。」

けれども、公生涯の後期には、異邦人への働きかけがあります。有名なのは、ツロとシドンの地方にいたカナン人の女です。彼女の娘が悪霊につかれました。それでイエスのところに行きましたが、こう言われました。「マタ 15:24 わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」けれども、彼女は食い下がりました。イエスは次に、「15:26 子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」イスラエルの子らに与えられたものであり、それを取り上げるのは良くないと言っています。」けれども、彼女は「15:27 主よ、そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」と言いました。そして主は、彼女の信仰は立派であるとほめられました。娘は即座に癒されました。

そして、主は、十字架につけられる最後の週、エルサレムの神殿の敷地でユダヤ人指導者と議論されました。その時に、ぶどう園と農夫の喩えを語られました（マタイ 21 章）。イザヤが、かつて 5 章で、イスラエルをぶどう園に喩えたのと同じです。神が、イスラエルを大切に育てたが、出てきたのは酸いぶどうの実であった、というものです。その比喩を使って、農夫たちが、主人の遣わしたしもべたちを打ちたたき、殺したことを語られました。それから、「私の息子なら敬ってくれるだろう」と言って送ったのですが、なんと農夫たちは、「あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう」と話し合いました。これが、彼らのことを指していたのです。

それで、彼ら自身がその喩えに対して、「21:41 その悪者どもを情け容赦なく滅ぼして、そのぶどう園を、収穫の時が来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう。」その通りで、イエスはこう答えられます。「21:43 ですから、わたしは言っておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。」この喩えに加えて、マタイ 22 章には、王子の結婚披露宴に、招待された者たちは断ったので、しもべたちが通りに出て行って、出会った人をかたっぱしから集めたので、披露宴会場がいっぱいになったという言葉があります。これこそが、今、イザヤが預言していることです。主を尋ね求めなかった者たちに、見出されたのです。呼び求めなかった国民たちに、わたしはここだと言われています。

そして、これが使徒の働きにも、ピシディア地方のアンティオキアの教会において、町中の人たちがパウロの話を聞いて、信じていくと、ユダヤ人たちの一部が罵り始めたので、パウロとバルナバが宣言しました。「使 13:46-47 神のことばは、まずあなたがたに語られなければなりませんでした。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています。ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。47 主が私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とする。』」このようにして、彼らが拒んだので、異邦人にかえって主を信じる者が現れるのです。

2C 主が御手を差し伸べた民 2－7

では、ユダヤ人は見捨てられたのでしょうか？決してそんなことはありません。この言葉はパウ

ロ自身が、ロマ 11 章の冒頭で語っていますが、次を見てください。

2 わたしは終日、頑なな民に手を差し伸べた。自分の考えのまま、良くない道を歩む者たちに。

主は終日、手を差し伸べておられます。これをパウロは、ロマ 10 章で引用しています。「10:21 そして、イスラエルのことをこう言っています。「わたしは終日、手を差し伸べた。不従順で反抗する民に対して。」」そして次に 11 章 1 節です。「それでは尋ねますが、神はご自分の民を退けられたのでしょうか。決してそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の出身です。」そう、パウロ自身がイスラエル人で、主が手を差し伸べておられるために、恵みによって救われていたのです。

3 この民はいつもわたしに逆らって わたしの怒りを引き起こす。園の中でいけにえを献げ、れんがの上で犠牲を供え、4 墓地に座り、見張り小屋に宿り、豚の肉を食べ、汚れた肉の汁を器に入れ、5『そこに立っていよ。私に近寄るな。 私はあなたにはあまりにも聖なるものだ』と言う。これらは、わたしの怒りの煙、終日、燃え続ける火である。

イスラエルの民が、忌まわしい異教の慣わしにしたがっていました。全て、神が汚れていると定めたものであり、死人に触れていること、豚肉を食べていること、これらは汚れているとモーセの律法の中に定められています。それでもって、その儀式を行なっているので自分は他の人たちより聖い状態になっているという、いわゆるオカルトをやっているのです。このことが、主が、御怒りを燃やしていることです。

そうです、主は私たちが罪を犯し続けているならば、そのことに対して、いたっていられない、憤りを抱いておられます。私たちは愛していますが、その罪を犯していることに対しては、憤りのまじった悲しみを抱いておられます。

6 見よ、これはわたしの前に書かれている。わたしは黙っていない。必ず報いる。わたしは彼らの懐に報いる。7 おまえたちの咎とおまえたちの先祖の咎を ともどもに。 ――主は言われる―― 彼らは山の上で犠牲を供え、丘の上でわたしをそしった。 わたしは、彼らのかつての行いを量って、彼らの懐に報いる。」

先に、残りの民が苦難の中で、「あなたの民であることに 目を留めてください」と嘆願していましたね。しかしそれは、自動的にイスラエル人だからといって、救われるということではありません。悔い改めて信じなければ、血縁がイスラエル人でも滅んでしまうのです。

このことを主イエスは、はっきりと説かれました。御国において、悔い改めた異邦人が集まって来

るのに、御国の者たち、すなわちイスラエル人たちがはぎしているしていると言われています。「マタ 8:11-12 あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。12 しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」

そもそも、悔い改めなければ滅ぶというメッセージを、歴代の預言者は説き続け、バプテスマのヨハネも、説きました。「マタ 3:7-9 ヨハネは、大勢のパリサイ人やサドカイ人が、バプテスマを受けに来るのを見ると、彼らに言った。「まむしの子孫たち、だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。あなたがたは、『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で思ってはいけません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。」当時のユダヤ教には、ユダヤの民族、その共同体に入っていることが、救われる条件としていました。だから、割礼は死活的なものであり、律法を守ってユダヤ人であることが必要なのです。異邦人は改宗のみによって救われます。しかし、それは聖書の教えとは反していたのです。

2B 残りの民と反逆の民 ８－１５

1C 主のしもべ ８－10

8 主はこう言われる。「ぶどうの房の中に甘い汁があるのを見れば、『それを損なうな。その中に祝福があるから』と言うように、わたしも、わたしのしもべたちのために、そのすべては滅ぼさない。

これは、ロマ 11 章でパウロが論じているものです。残された者たちがいて、彼らこそが、民全体をお見捨てになっていない証拠なのだということです。主の、そうした憐れみは、ソドムに対するみこころにも表れていました。ソドムに十人の正しい者がいれば、その町全体を赦すと、主はアブラハムにおっしゃられていました。

9 わたしは、ヤコブから子孫を ユダから、わたしの山々を所有する者を 生まれさせる。わたしの選んだ者がこれを所有し、わたしのしもべたちがそこに住む。10 わたしを求めた、わたしの民にとって、シャロンは羊の群れの牧場、アコルの谷は牛の群れの伏すところとなる。

主は地上に戻られてから、イスラエルの山々を回復させます。そこはイスラエルの子孫の所有となります。エゼキエルも預言しました。「エゼ 36:8 だが、おまえたち、イスラエルの山々よ。おまえたちは枝を出し、わたしの民イスラエルのために実を結ぶ。彼らが帰って来るのが近いからだ。」シャロンとは、今のテルアビブからカルメル山の間にある、地中海沿岸地域であり、アコルはヨルダン渓谷にあり、エリコの西にあります。つまり、低地と低地にある山地、サマリアとユダの山地全体を豊かに、そこを所有させると言っているのです。

2C 反逆の民 11－15

11 しかし、おまえたち、主を捨てる者たちよ、わたしの聖なる山を忘れる者、ガドのために食卓を整
える者、メニのために、混ぜ合わせた酒を盛る者たちよ。12 わたしはおまえたちを剣に渡す。それ
で、おまえたちはみな、虐殺されて倒れる。わたしが呼んでも答えず、わたしが語りかけても聞か
ず、わたしの目に悪であることを行い、わたしが喜ばないことを選んだからだ。」

「聖なる山」はシオンのことですが、「ガド」とは「幸運の神」です。そして、「メニ」は「運命の神」です。彼らは神の国に入ることができず、滅ぼされます。エゼキエルは、終わりの日にユダヤ人は救われるが、反逆者を選り分けた後で入らせることを預言しています。「20:38 あなたがたの中から、わたしに背く反逆者をより分ける。わたしは彼らをその寄留している地から導き出すが、彼らはイスラエルの地に入ることはできない。そのときあなたがたは、わたしが【主】であることを知る。」

13 それゆえ、神である主はこう言われる。「見よ、わたしのしもべたちは食べる。しかし、おまえた
ちは飢える。見よ、わたしのしもべたちは飲む。しかし、おまえたちは渇く。見よ、わたしのしもべた
ちは喜ぶ。しかし、おまえたちは恥を見る。14 見よ、わたしのしもべたちは 心の底から喜び歌う。
しかし、おまえたちは心の痛みによって叫び、霊に傷を受けて泣き叫ぶ。

主は、はっきりと、ご自分のしもべとそうでない者たちを選り分けておられます。これはちょうど、マタイ25章31節以降で、羊と山羊を選り分けるように国々を右に、左に選り分けたような姿です。右に分けられた者たちは、永遠の御国に入れられますが、左の者たちは永遠の地獄に投げ込まれます。同じようにして、大患難にいる者たちも、もし主を知らなければ、その患難の中で滅んでしまうのです。

15 おまえたちは自分の名を、わたしの選んだ者たちにのろいとして残す。神である主は、おまえた
ちを殺す。しかし、自分のしもべたちを ほかの名で呼ぶ。

主がニコデモに語られたことを思い出してください。新しい変化、新しい変革が与えられて、それで初めて神の御国に入れます。「まことに、まことに、あなたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ 3:3）」肉によるイスラエルであっても、御霊によって新たにされて、初めて神のしもべとなり、神の国に入ることができます。そして、そのように霊的に新たに生まれた者たちが、ほかの名で呼ばれました。「キリスト者」であります。

3B 新しい創造 16－25

そこで、イザヤは次に、新しい創造を預言します。霊的に神に新しくされ、次にこの天地すべてが新たにされて、すべてが新しくなる世界です。

1C 過ぎ去る涙 16－19

16 この地で祝福される者は まことの神によって祝福され、この地で誓う者は まことの神によって
誓う。 かつての苦難は忘れられ、わたしの目から隠されるからだ。

この地が、神が主権者、王となっている国になります。主が戻ってこられて、すべてが変えられます。そして、苦難が忘れられ、過ぎ去るのです。

17 見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。先のことは思い出されず、心に上ることもない。
18 だから、わたしが創造するものを、 いついつまでも楽しみ喜べ。見よ。わたしはエルサレムを創
造して喜びとし、 その民を楽しみとする。19 わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。 そ
こではもう、泣き声も叫び声も聞かれない。

彼らを待っていたものは、新しい天と新しい地です。この「創造」のヘブル語は、無から有の創造を意味する言葉です。創世記1章で、神が天と地を創造された時に使われた言葉です。神が、天と地を初めにお造りになられたように、まったく新しい秩序を再創造されます。そしてペテロはこの秩序の変化を次のように説明しています。「Ⅱペテ 3:12-13 そのようにして、神の日が来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません。その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。13 しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」

だから当然、先のことは思い出されることなく、心に上ることがありません。悲しみはすべてなくなります。黙示録 21 章 4 節に、新天新地における、新しいエルサレムの慰めが書かれています。「神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

2C 生き長らえる子孫 20－25

20 そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命を全うしない老人もいない。百歳で死ぬ者は
若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。

ここからイザヤの預言は、千年王国の幻になります。黙示録には、はっきりと区別されていて、千年王国があり、その後、最後の審判があって、それで新天新地です。20 章に、悪魔が底知れぬ所で鎖に縛られ、キリストにある者が主と千年間、この地を統べ治めることが約束されています。そして千年の終わりに、悪魔が解き放たれ、悪魔につくものがエルサレムを取り囲むけれども、主が火によって彼らを焼き尽くします。その後、悪魔が火と硫黄の燃える池に投げ込まれます。そして白い大きな裁きの御座が現われ、陰府にいた者たちが復活し、神の裁きを受けた後にゲヘナに投げ込まれます。それから新しい天と新しい地があるのです。ですから使徒ヨハネは、預言者イザ

ヤが区別せずに見ていたこの二つの姿を、主によってはっきりと、順番を追って示されたわけです。

21 彼らは家を建てて住み、 ぶどう畑を作って、その実を食べる。22 彼らが建てて他人が住むことはなく、 彼らが植えて他人が食べることはない。 わたしの民の寿命は、木の寿命に等しく、 わたしの選んだ者たちは、自分の手で作った物を 存分に用いることができるからだ。23 彼らは無駄に労することもなく、子を産んで、突然その子が死ぬこともない。彼らは主に祝福された者の末裔であり、 その子孫たちは彼らとともにいるからだ。

千年王国では、死は存在します。確かに寿命は木々のように延びますが、それでも死が全く過ぎ去ったことは書かれていません。黙示録 21-22 章にある新天新地は違います、全ての人が永遠に生きます。千年王国は、イザヤが預言したように、百歳で死んだらいわゆる不幸のようにみなされます。非常に長い寿命が、木のような寿命が与えられます。しかし、永遠に生きるということではないのです。

では彼らはいったい誰でしょうか？私たちも神の国で死ぬのでしょうか？いいえ、主にあって復活した人は新しい体、朽ちない体を身にまとっています。教会も、大患難の時に殉教し、よみがえった人々も死ぬことはありません。そうではなく、大患難生き残った国々の民、そして羊と山羊の選り分けで羊になった人々は、この肉体のままで千年王国の中に入るのです。今の肉体のまま、御国に招かれます。彼らは同じように子を産みます。その子も肉体を持っているので、死ぬことがあるのです。環境ははるかに良くなっており長寿ですが、永遠に生きるということではないです。

24 彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。25 狼と子羊はともに草をはみ、獅子は牛のように藁を食べ、蛇はちりを食べ物とし、わたしの聖なる山のどこにおいても、 これらは害を加えず、滅ぼすこともない。 ――主は言われる。」

千年王国において、神との語らい、その祈りが全く妨げられることなく行なわれます。それから、動物に弱肉強食がなくなります。すでにイザヤは、11 章でも預言していました。すなわち、神との間に平和があり、人と人はもちろんのこと、動物の間にも平和がある、平和が満ちたところです。

こうして、主は、残りの民に対して、その祈りを聞かれていますが、すべての人が自動的に神の国に入るのではないことを教えておられます。主に対して悔い改め、信じる者たちこそが神の国に入れます。彼らは、残されたイスラエル人たちは、最後に主が到来する時に、悔い改め、信じるために、彼らはみな、御国に入ります。反逆者は、患難の中で滅び失せます。

私たち異邦人も、キリストの十字架と復活のみわざ以外のことで、救われるはないことを知るべきですね。他の何物でもなく、キリストの義のみが御国へと入れさせてくれるのです。